

## 日本語要旨

### 言語獲得と言語喪失に関して

ウィリアム・オグレイディ （ハワイ大学マノア校）

本稿の目的は、第一言語獲得の幼児期における初期段階、長期にわたる第二言語習得過程、失語症（失文法症）の三つの場合に共通する障害に着目し、その解明を試みることにある。発達初期段階では、異なる認知機能が脳の中で限られた空間を占めようと競い合う。失語症は、記憶システムが脳に占める空間の不足に由来すると考えられる。かように、空間（容量）の不足は失語症で最も顕著ではあるが、第一言語獲得、第二言語習得においても同様の現象がおそらく起こっているのだと推測できよう。つまり、本論文では、第一言語獲得、第二言語習得、言語障害の三つの場合に共通しておこる障害は、「コンピューショナル（演算）・システムにおける損失が原因ではなく、コンピューショナル・スペース（演算容量）が不足するためにおこるものである」という主張を、代名詞の指示関係、関係詞節の解釈を例にとりながら、プロセス理論をもとに考察するものである。第一言語獲得、第二言語習得、言語障害のいずれの場合においても、「思考プロセスに大容量を必要とする複雑な情報は処理できないので、類似した間違いをおかすことになる」という現象を検証することは、人間の言語能力とその機能を理解するうえで重要な意味を示唆するものと考えられる。

### 帰国中高生の英語力喪失と保持に関する横断的・縦断的研究： 英語ライティング力からみた一考察

田浦 秀幸 （京都工芸繊維大学）

英語圏から日本に帰国した中学・高校生が、時間の経過に伴い英語ライティング力をいかに保持・喪失していくのか横断的・縦断的に調査した。Test of Written Language-3 (Hammill and Larsen, 1996) を用いて、ディスコース（読み手に与えるインパクト等、話の展開に関する側面）と（スペルや基本的な句読法を含めた）文法の両面から分析を行った。ライティング力を測定する有力な指標の一つである総単語数も分析に含めた。横断的研究 (N=108) の結果、ライティング力は帰国後 6

年間ほぼ保持されるが、4年目に一度大きな落ち込みがあることが観察された。一人の帰国生徒を縦断的に研究した結果、同様に4年目に総単語数において低下が見られたが、TTR (type token ratio) や TLU (target-like usage) を用いてさらに詳しく分析することで、正確さや複雑さの面では4年目に向上していることがわかり、総単語数の低下が必ずしも英語力の低下を示しているのではないことが判明した。さらに縦断的データを誤り分析した結果、統語・形態素に関して、一部分英語力の低下が観察された一方で被験者特有の化石化に起因する誤りも発見された。

## ろう教育とバイリンガリズム：手話言語と音声言語

鳥越 隆士 (兵庫教育大学)

本論文は、まず、社会・文化的な観点から見ると、ろう教育やろう者はバイリンガル状況にあると議論する。ここで「バイリンガリズム」ということばを使うが、ろう者の場合、2つの言語とは手話言語と音声言語である。日本では日本手話と日本語を意味する。これまで手話言語は抑圧されてきており、日本のろう教育でも長い間使用されてこなかった。ところが最近、いくつかのろう学校で、特に早期から手話が導入されるようになってきた。本論文ではさらに、手話を導入しつつあるろう学校のバイリンガルの状況についてエスノグラフィカルな記述を行う。その際、特に教師による教室での手話の使用や教育活動に焦点を当てた。その結果、次のような知見が得られた。まず教室のバイリンガル状況はさまざまであり、それは教師の手話に対する知識や態度に、また成人ろう者の教室活動への関わりの有無に依存していた。また教室のバイリンガル状況をさらに進めるためには、教師中心でなく、子ども中心の運営スタイルが有効であることが示された。これらの結果からバイリンガリズムがどのように、手話を導入したろう学校に構築されるのかについて議論する。

## 三者間会話における子どもの会話スキルの発達と親のことばかけの関係

加須屋 裕子 (文京学院大学)

上村 佳世子 (文京学院大学)

本研究では、母子三者間および父子三者間における、下の子どもに対する親のことばかけと子ども自身の会話運びのパターンや言語使用を2時点で観察し、語用論的スキルの発達過程と子どもの言語的社会化の意義を考察することを試みた。特に、父親が2人の子どもに接する際の相互交渉スタイルは、母親のスタイルとはどのように違うのか、さらにそのような文脈で子どもが父親(または母親)と上のきょうだいの会話に参入するためのスキルはどのように発達するかを明らかにすることを目的とした。その結果、2時点のいずれにおいても、三者間における会話が二者間における会話よりも長く継続し、子どもの平均会話交代数も三者間において多いことがわかった(三者間会話内で、同じ話題を共有する会話タイプ、例えば、母-子、母-兄、母-子-兄、子-兄の4タイプになる)。子どもの発話交代タイプ(話題への加入、転換、開始)の生起頻度が2歳5ヶ月時では低かったのに対して、2歳11ヶ月時では増加したこともわかった。さらに、母親が下の子との会話に従事する割合が兄との会話でよりも高い一方、父親は兄との会話を優先させる傾向が示された。このように、母親と父親ではそれぞれの子どもへのかかわりやことばかけに質的、量的な違いがみられ、言語学的にみて未熟な下の子どもについては、多様な言語環境に接することが社会的相互交渉のスキルの獲得に重要な機会を提供していることが示唆された。

## 日本語初期語彙発達に於ける名詞バイアスと母親の言語入力の特徴

宮田 スザンヌ (愛知淑徳大学)

大嶋 百合子 (マッギル大学)

西澤 弘行 (常磐大学)

従来、日本語の発達初期の語彙には名詞バイアスが存在すると報告されてきた。これは、言語類型論に基づく予測とは異なる。この現象を

調べるために、母親の入力と子の言語使用の関係を4組の親子について調べた。名詞および事物に焦点をあてた会話スタイルの母親（名詞と動詞のタイプ数、トークン数、および、それぞれの単独提示数に基づく名詞率と、事物に関する記述の頻度がともに高い母親）の子の語彙には、名詞バイアスが見られた。一方、名詞と動詞の割合がより均衡している母親の子の語彙には、均衡した、あるいは、動詞バイアスが見られた。本研究の結果より、日本語の類型的特徴というよりも母親の入力の個人的特徴が名詞バイアスの発達に重要な役割を果たしていることが示唆された。

## 日本語の動詞における活用

テリー・クラフェーン（ハワイ大学マノア校）

Pinker (1999) は、動詞活用のプロセッシング（形態素処理）に2つのメカニズムがあると主張する。規則動詞の活用では、語幹と接尾がルールで結び付けられるが、不規則動詞では、その活用形が直接記憶から取り出される。このモデルでは、子供の言語獲得における動詞活用のエラーについて、次のような4つの予測ができる。①不規則動詞の活用に規則動詞のルールが適用される、②動詞の正しい語幹を選択するエラーが少ない、③規則動詞より不規則動詞の活用のエラーが多い、④エラーのパターンに共通性がある。本研究では、Miyata (1992, 1993, 1995, 2000) の児童の縦断データベースで、コンピュータ検索を実行し、若い児童の動詞活用のエラーを調査した。上記の4つの予測とは異なる結果が得られた。日本語の規則動詞は、語幹と接尾に分けて分析されるのではなく、不規則動詞と同様に活用形がそのまま記憶されていると考えられる。動詞活用の分析において、膠着言語の日本語では、Pinker のモデルより、Bybee (1985, 2000) のスキーマ・モデルの方が適切ではないかと考えられる。

## 第二言語習得におけるナラティブの発達：「かえるくん、どこにいるの？」の語りの分析を通して

南 雅彦（サンフランシスコ州立大学）

本稿は、日本語母語話者および日本語学習者のナラティブ構造を分析

し、両者の相違と日本語学習者の特徴を、日本語能力との関連において考察するものである。24場面からなる絵画ストーリー「かえるくん、どこにいるの？」(Mayer, 1969)という絵本を被験者に見せ、「物語を作るように」という課題を与えた。これは、言語データをナラティブにまで広げることで、文法項目などの言語能力にとどまらず、学習者の言語運用能力の考察を本研究の主たる目的としているからである。語彙とナラティブ構造の二つの観点から分析を行ない、以下の結果が得られた。(1) 学習者の習得語彙分析では、絵語彙、類義語、反義語、単語類推など、異なるタスクの間に強い正の相関が認められた。(2) ナラティブ構造分析では、出来事(起きた事件は何か)といった前景描写に重点を置く学習者は、設定(誰が、いつ、どこで、といった情報)、評価(登場人物の気持ち)などの後景(背景)描写を、それほど重視しない傾向が見られた。(3) 母語話者との比較では、母語話者が後景描写に重点を置く傾向があるのに対して、日本語学習者は前景描写を重視する傾向が見られた。こうした結果は、日本語の習得・発達過程を理解する上で、後景描写が重要な習得・発達指標となることを示唆している。

## 文脈からどのように語彙の意味を推測するか？ 英語読解における児童の意味構築スキル

バトラー 後藤裕子 (ペンシルバニア大学)

本研究では、カリフォルニア在住の小学校4年生が文脈から未知の単語の意味をどのように推測するのか、またどのようにしてその意味を構築するにいったのか、その際に使ったメタ言語スキルを調査した。その結果、英語を第二言語とする児童(L2 児童)は英語を母語とする児童(NE 児童)と比較してこうしたタスクのパフォーマンスが低かったものの、その差は英語の全体的な語彙サイズを統計的に統制すると消えてしまった。この結果は、L2 児童の単語の意味を推測する力やメタ言語スキルの低さが、こうした児童の英語の語彙力の低さによるものである可能性を示唆する。児童が意味構築に使ったメタ言語スキルには、文脈内の情報量により、また児童の総合的な読解能力の違いにより違いがみられた。文脈内の情報量の多いテキストでは、読解力や英語を母語とするか否かに関わらず、児童は文脈に大きく依存していたが、文脈内の情報量が低いテキストでは、読解力の高い児童は語彙や形態素などの知識をもとにするなど他の手段を使って意味

を構築していた。

## 談話分析による様々な構造の『依頼－承諾』のやりとり

川手 - ミヤジェイエフスカ 恩 (テンプル大学)

本稿では依頼を引き受けて実際に行動に移した時と引き受けはしたが行動には移さなかった時の、電話で依頼に応じた時点での『依頼－承諾のやりとり』の方略に違いがあるかどうかの考察を試みる。分析された依頼－承諾のやりとりは各グループ3人ずつの4つのグループ(引き受けた依頼を行動に移した日本語母語話者と移さなかった日本語母語話者、そして引き受けた依頼を行動に移したアメリカ人日本語話者と移さなかったアメリカ人日本語話者)に分けられた。その結果、日本語母語話者は引き受けた依頼を行動に移した時は依頼を引き受けた時点でのやりとりで積極的に依頼に答えるという態度が見られたが、アメリカ日本語話者は引き受けた依頼に答えなかった時に積極的に依頼に答えるという態度が見られた。また、日本人話者からは引き受けた依頼を行動に移さなかった時、依頼を引き受けた時点でのやりとりで乗り気でないという態度が見られたが、アメリカ日本語話者の場合は引き受けた依頼に答えた時、依頼に応じた時点での依頼－承諾のやりとりから乗り気でないという態度がうかがえた。

## 第二言語学習者による照応形「自分」の解釈： 束縛理論と共感関係からの考察

狩野 暁洋 (明治学院大学)  
中山 峰治 (オハイオ州立大学)

本研究ではアメリカ人日本語学習者を対象にした日本語の照応形『自分』の習得について、慣用語、統語論、語用論の見地から調査した。大学で日本語を勉強している中上級(レベル3～5)の英語母語被験者21名と統制群の日本語母語話者27名に表記真偽判断テストが与えられた。結果として、慣用表現『自分で』の中にある『自分』の解釈に関して、実験群被験者はほぼ正しい判断ができており、統語的『自分』の用法については、レベル3と4に属する被験者間で、一番近い

主語のみを『自分』の先行詞として受け入れる傾向が強く見受けられた。語用的『自分』に関しては、共感動詞を用いた文の中に組み込まれている視点制約が認知できず、結論として、英語を母語とする日本語学習者にとって、慣用表現の中にある『自分』の文法規則は、統語的あるいは語用的制約にかかわる『自分』よりも比較的早い時期に習得できることを示唆している。また、英語母語被験者が『自分』に一番近い主語のみを先行詞として受け入れてしまう傾向については、母語の影響、実験方法に関する対策、意味論的、そして語用論的立場から論じた。

## 言語的及び音楽的な記憶能力は L2 発話能力に影響するか？： 日本人成人英語学習者の事例

田中 章浩 (国立身体障害者リハビリテーションセンター)  
中村 國則 (早稲田大学教育学部)

これまでの L2 適性に関する研究では、短期的記憶能力に関する指標として、主に言語刺激のみが用いられてきた。しかし、われわれの短期記憶に保持される刺激は言語的な材料だけではなく、音楽的、視空間的な材料なども含まれる。本研究では、これらの中でも、言語との構造的類似性を考慮し、とくに音楽の短期的記憶能力に着目した。われわれの仮説は、言語及び音楽に関わる記憶能力は英語の発話能力に影響するというものであった。そこで、日本人の成人英語学習者を対象とし、複数の言語的記憶課題、音楽的記憶課題、英語発話課題を実施した。因子分析の結果、言語的記憶能力と音楽的記憶能力は、2つの別個の能力と捉えるよりも、「聴覚的記憶能力」とでもいうべき単一の因子と捉えるほうがデータと適合することが示された。また、パス解析を実施したところ、「聴覚的記憶能力」因子は、音韻だけでなくプロソディをも含む「英語発話能力」因子に対して影響を与えることが示され、われわれの仮説を支持する結果が得られた。これらの結果をもとに、「聴覚的記憶能力」因子は聴覚ワーキングメモリの能力を反映している可能性について本稿では議論する。

## 日英バイリンガル大学生のコード・スイッチング： 態度、形式、機能

中邑 啓子 (慶応義塾大学)

本研究は、二つの研究に基づきコード・スイッチングを二つの視点から考察している。一つ目の研究は、コード・スイッチングに関する言語態度調査の研究である(対象：東京の大学に通っている120人の日英バイリンガル)。回答者は、バイリンガリズムやコードスイッチングへの態度に関する質問紙を記入し(例：自分を「バイリンガル」と思うか、自分がコード・スイッチングをするかなど)、その結果を分析している。二つ目の研究は、最初の研究の対象者が収集した400の日英コード・スイッチングの例文を分析した研究である。統語的分析の結果、3種類のコード・スイッチング(タギング、文章間、文章内)が見られ、機能分析の結果は、様々な会話機能(例：話題を変える、感情表現、強調、結束や親密さの現われなど)があることがわかった。

## 言語獲得の謎を解く：多言語獲得システムMLAS

須賀 哲夫 (日本女子大学)

本論文は乳幼児の言語獲得能力をシミュレートする多言語獲得プログラム MLAS の制作についての報告である。MLAS は人間の自然言語ならどんな言語でも原理的に4、5歳レベルまで獲得できる能力を有するとみられ、JSL S2001において英語と日本語を用いてそのことが公開された。この能力は言語獲得に関連するさまざまな難問を解決することにより達成されたものであり、その構成原理は言語獲得の新しい理論を提供することとなる。まずMLASの能力を概括し、その設計上の特徴は(1)プログラム生成プログラム、(2)言語学の格概念によって記述されたストーリーに基づく意味獲得、という2点を中心に説明する。次に、言語獲得の解明を久しく妨げ続けてきた重要な問題として(1)句構造解析、(2)語形変化と文型変換解析、(3)実用論的意味解析、(4)記憶システム設計、などの問題を採りあげ、MLASにおいてそれらが実際上または理論上どのように解決されているかについて議論する。